



日本記者クラブ  
囲む会

## 北は核と長距離ミサイル開発をあきらめないだろう

デービッド・ストラウブ 元米国務省朝鮮部長

2012年4月20日

国務省で朝鮮部長、日本部長を務めた専門家の北朝鮮問題に対する基本的な見方は、次のようなものだった。

- ①ソ連・東欧の崩壊を見た北は、核弾頭長距離ミサイル開発を体制のサバイバル戦略に位置付けた。したがって、これを放棄することは考えづらい。この体制が一番恐れているのは米国でなく自国民なのだ。いまは中国のサポートを前提にして、ゲームを仕掛けているのだ。
- ②カギを握るのは、短中期的には朝鮮半島の現状維持を望んでいる中国の影響力なのだ。今後ますます北は中国に依存せざるを得ない。民主主義国とはいわないが、いまの中国のような多元的でリベラルな社会に北が移行することは歓迎だ。長期的に見て、中国の北朝鮮への態度が変わる可能性はあるし、それを助長するよう努めるべきだ。
- ③ただ中国は、日米中の間にもっとしっかりした相互に信頼し合えるような仕組みが構築されるまで、中国の政治システムがより民主化され、自信をもってことに当たることができるような体制が出来上がるまでは、残念ながら北朝鮮問題に対してはネガティブな役割を果たし続けるだろう。

司会： 会田弘継・日本記者クラブ理事（共同通信論説委員長兼編集委員室長）  
通訳： 長井鞠子（サイマル・インターナショナル）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

[http://www.youtube.com/watch?v=EKnQb5B9Wcw&feature=plcp&context=C4e9bd8cVDv.jVQa1PpcF0h\\_oCUH99N2SsKdF.jxzdtw8vyY111CfA%3D](http://www.youtube.com/watch?v=EKnQb5B9Wcw&feature=plcp&context=C4e9bd8cVDv.jVQa1PpcF0h_oCUH99N2SsKdF.jxzdtw8vyY111CfA%3D)

巻末に略歴があります

©公益社団法人 日本記者クラブ

## 司会（会田弘継理事・共同論説委員長兼編集委員室長）

きょうは、極めてタイミングよくストラウブさんにおこしいただきました。実はもともと計画されていてこうなったのではなくて、たまたまこうなったわけですが。

デービット・ストラウブさんには、ここにお集まりの何人かの方は、多分、取材でいろいろお世話になったと思います。お手元の略歴にあるように、国務省で日本デスクというか、日本部長もされたし、朝鮮問題の専門家であります。いまはスタンフォード大学におられます。

時間がもったいないので、早速、ストラウブさんにお話をうかがいます。

**ストラウブ氏** まず会田さん、日本記者クラブのみなさま、そしてご参加いただきました方々にお礼を申しあげたいと思います。まことに絶妙なタイミングでの会見となりまして、あらかじめ想定して私がこれを計画していたんだと、本当はいいたいところでございます。

ジャーナリストというのは、職業の性質上、質問するのが大好きな方々でありますので、冒頭発言はできるだけ短くし、みなさま方の質問を楽しみにしたいと思います。質問のみならず、コメントも楽しみにしたいと思います。なぜならば、私は、北朝鮮問題に関しましては、唯一専一的に知識を持っているとは全く思っていないからであります。

タイミング的にいいますと、まさに北朝鮮におきまして新指導者が生まれ、新指導者を取り巻く人たちもまた新しい顔ぶれになったというときでもあります。しかしながら、その実は、あまり目新しくもないということもいえるのです。

今回、金正恩が指導者に選ばれているわけがあります。けれども、これは最も指導者たるべき有能な人材だからということで選ばれたのではなく、まさに北朝鮮という体制を安定的に継続するというところにぴったりの人物であるという、まさにその理由によって選ばれたからであります。

2011年の12月に彼の父が死亡して以来、そ

んなに時間がたっていないわけでありまして。けれども、それ以降の北朝鮮の行動をみますと、以前と変わらず、あるいは以前よりも若干悪化したかというふうにみてとれます。

我々がよく知っておりますように、今年に入って2月29日に米国と合意に到達したのに、せいぜい16～17日しかたたないうちに、その合意は北朝鮮によって破られました。

4月13日の金曜日に、北朝鮮が、ミサイルといいますか、ロケットといいますか、それを発射しようとしたことによりまして、この合意は破られたのであります。

## 悪化してきている北の挙動

しかし、それ以外にも北朝鮮はいろいろな悪いことをやっております、あまりにもその数多いがために、もう我々、ほとんど注意も払わないという状況であります。

例えば昨日、韓国が、北朝鮮は今回の100周年のお祝いに、またミサイルを打ち上げることにあれだけのお金を使っているけれども、あの金額を国民に食べ物を与えるということに使うことができたならば、何年間も国民たちに食べさせることができたのではないかという批判をしました。そうしたところ、北朝鮮の軍部の方が、そのようなことは全く受け入れられない、そして北朝鮮はソウルを攻撃することもいとわないという発言をしております。

金正恩が正式に最高首領となったのは先週のことですけれども、彼が実際に権力の座に上り詰める動きが始まったのは、2009年の秋に金正日が発作を起こしたとき以来ということがいえるのではないかと思います。それ以降、北朝鮮の行動、挙動は、それ以前に比べまして悪くなっております。

例えば2009年には、長距離ミサイルの発射をいたしましたし、核実験の第2回目を行っております。それから2010年には、韓国海軍の艦船を砲撃し、沈めるということを行いましたし、またその同じ年に、韓国の島を奇襲いたしましたし、そこでは民間人の死者が出ておりま

す。このような攻撃、砲撃があったというのは、朝鮮戦争以来初めてのことであります。2010年になりますと、ウラン濃縮施設があるということアメリカ側にみせておりますし、今回はご存じのようにまたミサイル・ロケットの打ち上げ……。

やっていることの内容でいいますと、これまで北朝鮮がやってきたこととおおむね同じような内容の行動をとっておりますけれども、そのような、いってみれば悪しき行動がとられるようになったペースが、はっきりと上がってきております。

なぜこのようにペースが上がってきたのかということのわけは、よくはわかりませんが、憶測することはできるわけでありまして、1つの可能性として、北朝鮮の体制としては、このような指導者交代に当たって、非常に強い指導者がいるのだということ北朝鮮の軍やみずからの国民に示すことが必要であった。それと同時に、外の世界にも強さを示す必要があったということなのかもしれません。

### 中国のサポートに自信を持つ

これまでの10年、20年、北朝鮮としてはいろんなことをやってきたけれども、彼らの考えからすれば、総体的に国際社会から受ける制裁の度合いがそんなに大きくないというふうに感じているということなのかもしれません。特に中国のサポートということでもあります。何をやろうとも中国はちゃんと北朝鮮を支持し続けるし、ある意味でその支持のレベルは上がっているとすら、彼らは思っていると思います。

ですから、我々の憶測といたしましては、これから数カ月ぐらいの間に、ひょっとしたら次なる核実験のテストをするのではないかとということが考えられます。

もちろん、それが必ずあるということがわかってはおりませんが、私は、確率としてあると思っております。特に2006年、2009年のロケット打ち上げの後に、彼らはそういうことをいたしましたし、最近のいろ

いろ報道発表、それから数週間前から撮られている衛星写真などによりますと、どうも第3回目の核実験をする準備をしているように思われます。

それからロケット発射の失敗ということに関しては、北朝鮮のことをいろいろとみている人たちにいわせると、あれは新リーダーにとりましても、また彼の体制にとっても大変な恥であった、大恥をかいたということでもあります。ある意味で新しいリーダーの権威が損なわれたということもいえるわけであり、だからこそ3回目の核実験を行って、その失われたメンツを取り返そうとしているということも考えられます。

でも、核実験の準備は、ロケット発射の準備をする前からやっていたと思います。あれが実際に成功したか成功しないかということとは別に、それとは関係なく前から準備をしていたと思われます。

私個人は、今回、あのミサイル発射が失敗したということは、金正恩のリーダーシップに対してそれほど大きな影響をもたらすものとは思っておりません。

なぜ私がそう思っているか。基本的にいいますと、北朝鮮の指導層は1回のミサイルの発射が成功したか、しなかったかということに立脚してものを考えるのではなくて、もうちょっと長期的な見方をする体制であるということをお願いするのであります。

今回のミサイル発射は、北朝鮮の長期的な戦略という観点からは意義深いものでありました。それでは、いまから短く、北朝鮮の長期的な戦略とは何なのか、また、それを私がいう根拠は何なのかについて説明します。

私は、北朝鮮問題の発端になっている要因は、基本的に2つあると思います。

まず1つの理由は、朝鮮半島の民族、それから朝鮮半島そのものが2つに分断されているという問題です。

そして2つ目は、朝鮮半島の北には全体主義的な体制が存在するという点です。

それはどういうことを意味するかといいま

すと、北朝鮮の指導層、体制側は、みずからの国民のことを恐れているのです。なぜならば、体制側は国民にうそをついてきたし、国民を保護することができないできたし、そして飢餓に瀕するということから国民を守る、防ぐということすらできないできたからであります。

また、北朝鮮はコマンド・エコノミー、計画経済、指令経済を持っておりますために、完全に破綻した経済体制になってしまっている。そしてこのことは、軍が必要としていること、あるいは国としてやらなければいけないことに対して、資金的なサポートをすることができていないということの意味します。

また、北朝鮮の指導部というのは、情報も結構しっかりと持っております。また、みなさんや私と同じぐらいの知性のレベルを持っている人たちであります。ですから、自分たちがどのような状況に置かれているかということにつきましてはよく認識をしている人たちです。

彼らは、生きるか死ぬかというジレンマに直面しているのです。彼らは自分たちの経済を少し、てこ入れしなければならぬということを知っています。そして、経済をよくするためにはある程度外国の投資家に対して開放しなければいけないということを知っております。それをしなければ、自分たちが生存する、存続をするための基盤が失われてしまうということを知っています。

しかしながら、みずからの国を外の世界に開くということになりますと、国民はすぐに、いかに国家が自分たちにうそをついたか、いかに政府というのは無能であるかということに気がつくでしょう。そうすれば自分たちの政権は転覆されてしまうということを、彼らは知っています。

### 核と長距離ミサイルでのサバイバル

彼らは、かつてソ連が、そしてソ連を取り巻く東欧の衛星諸国がどうなったかということをつぶさにみて知っているわけでありまして。そして彼らはそのときに、自分たちのところには

絶対それと同じような状況は許さないということを決意したのです。

したがって、このジレンマを解決するための自分たちの戦略は何かというときに、彼らが考えついた要素が、核兵器であり、そしてその核兵器を運搬するための長距離ミサイルでありました。

これをすることによって、彼らはなにを望んでいるのか。米国及びその他の国々が制裁を少し軽減してくれるようになるであろうし、それから韓国にある政治世論をさらに分断することにつながるだろうし、そして自分たちの経済をある程度成長させることができ、それがみずからの体制のサバイバルにつながり、そしていずれの日にか——彼らはまだこの希望を捨てていないわけでありまして——自分たちの条件下での朝鮮半島の統一をなし得るであろうというふうに望んでいるのです。

最後に、若干お時間をいただきまして、それでは北朝鮮に対してどのような対策を、あるいは対策としての戦略をとり得るのかという話をしたいと思います。日本、アメリカ、それから韓国、その他の国際社会がとり得るカウンター戦略であります。

今までのところ、国際社会（これはアメリカを含めた国際社会でありますけれども）は、アメリカが特に北朝鮮を脅しているの、北朝鮮としては核兵器を持たなければならないといっているその主張に対して、ある程度の信任性を与えているような状況にあります。

しかしながら、歴史をひもといてみればすぐわかるわけでありまして、アメリカは一度も北朝鮮を攻撃したことはありません。

事実はまさにその逆でありまして、これまでの60年間、北朝鮮の方が何度も繰り返してアメリカ及びアメリカの同盟国である韓国を攻撃したのであります。

そして、我々の対応ぶりは、せいぜい、例えばどのような軍備をしているかということを示すとか、あるいは軍事演習をするというような形での反応であり、しかもそのような反応もまれなことでありました。

ですから、北朝鮮が本当に恐れているのはアメリカではない。実は北朝鮮が本当に恐れているのは自国民であるということなのであります。自国民がいずれの日か政府を信任しなくなり、そして、いずれは政府転覆ということに出るかもしれないということが一番恐れているのであります。そして国際社会、外の世界といたしましては、そのことにつきましては何かをするというような対策を打ちようがないのであります。

### 北朝鮮のゲームに乗ってはならない

私は数十年間にわたりまして北朝鮮の状況を分析し、またそれをウオッチしてまいりましたけれども、その結果の私の結論は、だから北朝鮮のゲームに乗ってはならないということです。

北朝鮮が核プログラム、核兵器プログラム、あるいはミサイルプログラムをあきらめるための唯一の条件は、外の世界を自分たちがどういうふうにみるのかということに関する北朝鮮の態度そのものが変わること、あるいは北朝鮮が自分たちの体制をどういうふうにみるかということの態度が変わることです。しかしながら、私は、これはあきらめないだろうという結論であります。

その間、我々が北朝鮮問題に対処するためには、長期的な展望でもってことに当たる必要があります。

こういうことをいいますと、国際社会、あるいはアメリカは何もしないということなんですか、北朝鮮がこういうプログラムを持っているということを受け入れる、何もしないということなので、というふうに受け取る方がいると思います。

全くそういうことを意味しているのではありません。そうではなくて、アメリカは、必ずしも北朝鮮だけを相手に話をするのではなく、ほかの世界をしっかりと取り込んで、そして、そこと一生懸命話をしていくことが必要なのであります。将棋の盤と申しますか、戦

略的にどういうふう勝負を進めていくのかということにつきましては、必ずしも北朝鮮とだけではなく、世界のすべての国々と話し合いをしていく必要があるのです。

北朝鮮が我々にゲームを仕掛けてくるのではなく、本気で、誠実に、まじめに交渉しようということを示してくれたときには、いつでも我々はそのような北朝鮮と話をすべきであるし、また交渉もすべきであります。

我々はその間、努力を結集し、安全保障という世界の中におきまして北朝鮮が攻撃をすることがないように、彼らに対して抑止力を行使することも必要であります。もし北朝鮮が攻撃をしかけてくるということがあった場合には、それに対する防衛をする必要があります。また、外の世界が大量破壊兵器に関する技術あるいはその兵器そのものを北朝鮮に持ち込むことがより難しくなるように努力をすべきであります。また、北朝鮮の方から外の世界に、大量破壊兵器がらみの技術などを輸出することをより難しくするように努力すべきであります。

いずれ北朝鮮は変わっていくでありましょう。どんなことをしても情報というのは、徐々にではあれ、北朝鮮にじわじわと入っていくからであります。例えば中国に対する依存を北朝鮮はこれからどんどん増していかなければなりません。中国は決して民主主義国家とはいえないかもしれませんが、北朝鮮に比べれば多元的な社会であり、リベラルな社会であります。そういう国である中国に北朝鮮は依存していかなければならないからです。ですから、いずれ北朝鮮は変わっていくでありましょう。

この、私が北朝鮮という病気に対して下す診断にいたしましても、また予防にいたしましても、みなさん方からみればいらいらするような内容のものだということはわかっております。

民主主義の社会でありますアメリカ政府、日本政府、あるいはどの国でも民主主義政府であればそうだと思うのですけれども、この問題は解決できませんということはいえないわけです。解決できないといいますと、野党側の方が、反対勢力の方が、いやいや、だったら私たちに

任せてくれたら、うちが解決できるということ  
をいうからです。

しかし、長期的には、説明しましたように、  
北朝鮮の内部に存在しておりますプロセスゆ  
えに、それから、私がというようなアプローチを  
ほかの国々がとるようになれば、いずれ北朝鮮  
は変わるということに、我々自身も貢献するこ  
とができるようになるであります。プラス  
の意味での変化が生まれるということに貢献  
することが可能だと思います。

そして、その間、どんなに長い期間であつた  
としても、我々が努力を結集していろいろなこ  
とをやっていけば、北朝鮮という脅威、それを  
ともに管理することができないなどというこ  
とをいう理由は全くないと思います。以上です。

## 《質疑応答》

**司会** どうもありがとうございました。司会  
の特権でひとつ質問させていただきたいと思  
います。

2月29日の米朝合意というのは一体何だっ  
たのかということですが、いくつかの推測が成  
り立つかと思います。果たして北の外務省、金  
柱寛は、この4月に当然行われるミサイルテス  
トのことを知らなかったのか。内部で何かそう  
いうコミュニケーションのディスコネクトが  
あるのか。あるいは2月29日の合意というの  
は何か1つのゲームだったのか。ゲームだとす  
れば、どういう意図を持ったゲームだったのか。  
ストラウブさんの読み方を教えてください。

**ストラウブ氏** 私はいまの質問に関する内  
部情報を持ち合わせているわけではありません  
けれども、米国政府が北朝鮮と協議を行うと  
きにそこにいた経験に立脚していくつかの解  
釈を述べることはできます。

金柱寛がミサイル発射の計画について知ら  
なかったという可能性は、私はあつたと思いま  
す。しかし、その確率は結構低い。

過去におきましては、あたかも3年ごとに定

期的にロケット発射があるような感じであり  
ますけれども、このようなロケット発射をする  
ときには、相当長期にわたる準備が必要であり  
ます。これは北朝鮮のほぼ常設プログラムみた  
いな感じがするわけでありまして、権力の中枢  
部にあれほど近い金柱寛のような人物が、この  
ロケットの準備状況を全く知らなかったとい  
うことは、かなり蓋然性は低いのではないかと  
思われます。

でも、議論のために、金柱寛は知らなかつた  
としましょう。しかし、たとえそういう前提に  
乗ってものを考えたとしても、金柱寛というの  
は、交渉する、話し合いをするという権限は持  
ってございましたけれども、合意を結ぶという権  
限を持っている人ではありません。協議をした  
結果、平壤からのトップの承認を得て合意をま  
とめるのです。調印をするとか、あるいは最終  
的な形にまとめる、そういった権限は持ってい  
ない人です。そうなりますと、北朝鮮の  
権力の中枢部であるトップのところ、合意の  
内容も知らなかつたし、ミサイルの発射につ  
いても知らなかつたなどということは、ちょっと  
信用できないということになります。

もう1つの可能性としては、あなたの質問に  
ありましたように、北朝鮮がゲームを仕掛けて  
きたのか、あるいはもっと大胆に言えば、まさ  
にだまそうと思ってやったのかということ  
であります。

## 2月29日の合意で震にかけた

次のように北朝鮮が考えた可能性もありま  
す。アメリカがこの合意に賛成して、そしてロ  
ケット発射をたどえしたとしても、その発射の  
後でも、アメリカの方としては2月29日の合  
意をブレイクしたくないと思っているだろう  
というふうに北朝鮮が考えた、それは可能だ  
と思います。

その根拠といたしましては、もしアメリカが  
この合意に背を向けることになると、次に  
アメリカは第3回目の核実験が行われるので  
はないかということをお心配しなければなら

くなる。それからまたアメリカは、ウラン濃縮施設をみせてもらうということもできなくなるだろうし、寧辺の核施設の凍結ということも実行されないという事態に直面する。そう考えるからです。

それから、24万トンの食糧援助ということを実際に公表したけれども、それはあくまでも人道的な支援であるという根拠でもって与えるのであり、少なくともアメリカ人の目からみたら、これは核プログラムとは関係のないものであるという形で提供されるのだと、北朝鮮は理解していたと思います。

だから、もし我々が例えばミサイルを発射したとしても、アメリカはその食糧支援の流れをとめるなどということをするだろうか、北朝鮮は考えたんだろうと思います。そんなことをすれば、人道支援だといっていたアメリカがメンツを失う、辱められるということになってしまうと思ったのです。

はっきり申しておきますけれども、私は、今回の合意を結ぶに当たってアメリカの交渉側のやり方が間違っていた、まずかったということをつもりは毛頭ありません。アメリカの交渉担当者は誠心誠意あの交渉をまとめたと思いますし、非常に注意深く、用心深く交渉をまとめております。例えば食糧援助にいたしましても、一括して渡すのではなくて、月ごとに分割して渡すというふうについております。なぜならば、過去において苦い経験をしているからであります。

非難されるべきは北朝鮮側であります。北朝鮮側が意図的にアメリカ側を間違った導き方をして、合意の内容につきましても、それを間違っただけでミスリードしてアナウンスさせたのであります。そして、自分たちとしては全然守るつもりもないようなアグリーメントを発表させ、しかもそういうことをすることによりまして、完全にアメリカをわなにかけたということだと私は思っています。

**質問** 先ほどの話の中で、今回のミサイル打ち上げ失敗によって金正恩の指導力には大き

な影響がないという見方をされた。ただし、その後の話で、北朝鮮の指導部が本当に恐れているのは自分たちの国民だというお話でした。国民を恐れているのであれば、今回の失敗をみた国民の心が金正恩から離れていくのではないかと思うのですが、その辺の説明をもう一度お願いしたい。あと、もし可能であれば、オバマ政権が今回の件でどの程度いら立っているかというようなあたりをコメントしていただければと思います。それから、11月に大統領選を控える中で、オバマ政権が今後どの程度本格的に対北政策を進められるのかもコメントしていただきたいと思います。

### ミサイル発射失敗の影響は小さい

**ストラウブ氏** 私は、北朝鮮が一番恐れているのは自国民だといいましたけれども、それはあくまでも長期的な観点からであります。今すぐ恐れている、何かが起こるということを意味したわけではありません。なぜならば、いま現在は、北朝鮮の国民には外部からの情報はそんなに入っていないし、また北朝鮮の指導層は、その情報を厳格にコントロールしております。もしそれに従わないというような人がいたときには、残虐に抑圧をしているからです。

いま金正恩体制が満足させなければならぬ人々というのは、その指導部を取り巻いている人々及び軍部であります。

私は、ミサイル計画を続けるということは、金正恩の心の中では、軍部及びその他のエリート層がこれを望んでいるだろうということを考えて、ミサイルプログラムを続けているんだろうと思います。

みなさん、これは北朝鮮の人だってよく知っていると思うのですけれども、ロケット科学というのは極めて難しいことであります。特にロケット開発の初期の段階におきましては、そういうものはよく失敗するものだというのはだれでも知っていることであります。私自身も子供のころよく覚えておりますけれども、アメリカのミサイル・ロケットが、50年代、60年代、

打ち上げたと思ったら、それが飛ばなかったというような例を数多くみております。

北朝鮮の権力を持っている層の人たちはみんな、今回、ロケットを発射することに対しては多大の関心を有していました。ただ、金正恩がかかわっていた 1 つの問題としていえるのはタイミング、それをいつにするかということについては、彼自身がかかわっていたかもしれせん。

今回のロケット発射失敗が金正恩のステータスに悪しき影響を与えるかもしれない、ということが想定できる 1 つの状況がそこにあり得ると思います。

もし軍部の人たち、あるいは権力を非常に持っているような民間人、いわゆる軍ではない背広組の人たちが、金正恩に向かって、今回のミサイル発射はぜひやめてください、100 年祭とくっつけてやるのはぜひやめてくださいということ強く訴えたにもかかわらず、金正恩が、いや、これは絶対やる、なぜならば、これは自分の祖父と父の思い出のためにやるのだから絶対やる、と回りの助言に抗してやってしまったということで、あのタイミングになったとするならば……。そして、あれが失敗したということでもありますので、それは彼の権威、あるいは彼の回りを取り巻く背広組の人たち及び軍部の人たちの目においては、金正恩のステータスが弱体化したというふうに映ったかもしれません。

ただし、そのようなシナリオは、可能性としてはありますけれども、実際は非常に低いものでしかないと思います。なぜならば、金正恩はまだ 30 歳にもなっていない。しかもリーダーとなって初めての公式の場である。そのような中で、回りのエリートたちの助言を覆すということを日常的にやっている、あるいはたまにだとしてもそういうふうに助言を覆すなんていうことはなかったのではないかと思います。ですから、あのロケット発射のタイミングは、恐らくは集団的な助言、集団的なアドバイスに基づくものであったろうと想定されます。

オバマ政権についてですけれども、オバマ政

権は、昨年、北朝鮮の状況につきましているいろいろと考えた結果、行くも地獄、去るも地獄ということで、やってもだめだし、やらなくてもだめだということがわかっただろうと思います。

## オバマ政権は性急に動かないだろう

私はこれに関しましてインサイダー情報を全然持っておりませんが、次のようなことは想像にかたくないと思います。オバマ政権というのは政権ですから、諜報もちゃんと持っておりますし、また北朝鮮との歴史的な経緯もよく知っているわけでありまして。ですから、北朝鮮は 2012 年中にはロケットの発射をするだろうし、第 3 回目の核実験をするだろうということは、ある程度前提にさせていただこうということは考えられます。

オバマ政権としては、多分、それに先立つ 2 年半あるいは 3 年前の政策を踏襲したというだけのことでありましょう。そして今年には北朝鮮が実際に長距離ミサイルを発射し、核装備を実験したということがあるわけです。そうすると共和党の選挙戦で出てくる対立候補からは、なんだ、オバマ政権はこういうことをしたから、このような政策をとったから核実験も行われてしまったのではないかと、長距離ミサイルも発射されてしまったのではないかと、オバマ政権は全く無能だ、実効性のない政権だというふうに批判されます。

もう 1 つの可能性としては、オバマ政権がそれとは全然違った政策をとりまして、まあ、若干かもしれないけれども、少しでも北朝鮮をして長距離ミサイルや核実験などをしにくくするような、そんな内容の交渉を再びして、アグリーメントを結ぶような努力をする。そういう政策をとるということも 1 つの可能性です。

おそらくオバマ政権は、この 2 つのうちの後者の方を政策として選んだのではないかと思います。ただ、オバマ政権というのは北朝鮮に関しましては非常に情報をよく持っている政権であります。北朝鮮との直接経験を持ったような人たちの情報も持っておりますし、そして



よく情報を持った上での政策のとり方であったと思います。

他方、北朝鮮でアメリカ側と対応するような交渉担当官というのは経験豊かな人たちでありまして、アメリカのこともよく知っております。しかも、同じ仕事を20年間もずっとやっているような人たちであります。

しかし、そういう北朝鮮であっても、これまで、例えば合意を結んで、それが3週間以内に明らかに破られてしまうというようなことは、過去にありませんでした。ですから、これは北朝鮮側からみても、今までになかったような展開であります。

今回の苦い経験の後では、オバマ政権は、北朝鮮の後を追いかけて、ぜひ話し合ひましょう、話し合ひましょうというような、そういう道はとらないと私はみております。

ちなみに申し上げますけれども、いま対立候補になりつつありますロムニー氏は、このような事態の展開に関しまして次のようなコメントをしております。オバマ政権の北朝鮮政策は無能であり、効果性のないものであり、単純過ぎ、そしてはっきりとした融和主義であるということを行っています。ということで、去るも地獄、行くも地獄という状況です。

**質問** やや中期的にみて、北朝鮮の内部崩壊の可能性はあるかどうか。内部崩壊をするときは指導層が割れるときとだと思っておりますけれども、割れる原因としてちょっと思いつくのは、アラブの革命のように外の情報がもっとどんどん入ってくる、これが1つ。

それから、飢餓状態がひどくなって、難民が、幾ら抑えても中国やロシアに向かってふえていく。それからもう1つとしては、例えばいま中国の指導層がごたごたしておりますね、その中国が何らかの理由で北朝鮮に対する態度を変えとか。いますぐの問題ではないのですが、いまのような可能性の中でどれが一番可能性があるかということについてはいかがでしょうか。

**ストラウブ氏** 私は、これは中期というより

もやはり長期的な問題だと思っております。中長期的には、いまおっしゃった3つの理由は、すべて可能性があると思います。

外部からの情報流入ということにつきましては、DVD、CD、放送、それから多くの人たちが、特に北朝鮮と中国との間で行き来をしているということから、外部の情報量というのはふえてはおります。

飢餓で難民が大量に発生するというのは、おっしゃった3つの中では一番可能性が低いのではないかと思います。なぜならば、1990年代の飢餓から北朝鮮の国民たちは学んだのです。飢餓状況に関しては、自分たちで何とか手当てをしなければだめなんだということ学んだのです。北朝鮮では、いま、やみ市場といえますか、グレーマーケットといえますか、相当大規模に展開しております。

### 中国の北朝鮮への態度は変わり得る

将来的には、中国の対北朝鮮態度は変わり得ると思っております。しかし、短中期的には、私はあまり楽観視しておりません。中国というのは、朝鮮半島は現状のままでいてほしい。特に不安定要素などというのは一番中国が望んでいないことであります。何となれば、中国は自分たちの国内的なことに集中したいからです。

中国人は、特に北朝鮮人を好きだということでもないし、北朝鮮が中国を好きだということも特にはないのですけれども、それぞれの異なる理由ゆえにお互いを必要としている。そこで、両者の間の協力はこれまで以上にふえてきています。

中国ではここ数年来、特にインテリの間では、いまの中国の対北朝鮮政策は正しいんだろうかということが議論されるようになってきております。多くのインテリ、それからまた政府の部内にいる人たちでも、北朝鮮というのはひょっとしたら中国にとって戦略的なマイナスではないかということを考える人がふえていきます。

何となれば、中国は非常にアメリカのことを

警戒しているからです。中国としては、例えば朝鮮半島がアメリカの同盟国として統一されるなどということはみたくない。アメリカが中国に対するよりも、より友好的な態度を持つような北朝鮮になってほしくはないと思っているのです。

ですから、よい方向へ北朝鮮が変わるであろうことを示唆する一番強い要素は、外部からの情報がより多く北朝鮮に入るということでしょう。ところが、ここが皮肉なのですけれども、この外部情報というのは、ほとんどの場合、中国経由で入っていきます。

ただ、このようなドラマチックな変化が起こるであろうまでの間、我々としてはやはりベストを尽くして、中国のインテリの人たちで、ひょっとしたら北朝鮮を違うふうにしていくことの方が中国の理にかなうのではないかと考えている人たちができるだけ多数を占めるように、世論の主流になるように手をかしていく。そのためのベストを尽くすということをするべきであります。

でなければ、中国はそのような変化が起こることをとめてしまう可能性もあるからです。

**質問** 6者協議の方式が果たしてよかったのかどうか。いまお話になった中国がイニシアチブを握っていますが、アメリカはこのやり方について反省しているのか、あるいはほかのやり方があるのかどうかというようなことを考えているかどうか。

### 9年間の6者協議の評価は？

**ストラウブ氏** 重要で、しかも大変よい質問をありがとうございました。9年間、6者協議をやってきました。その間、北朝鮮は1回、2回と核実験を行い、そして今回3回目の核実験をしそうなあンばいになっております。また、長距離ミサイルは2回も発射し、それから、絶対にそんなものはないみたいに完全否定をしておりましたウラン濃縮施設も、完全に、本格的に完了しております。

このことから、あからさまにみえてくることがあります。それは、北朝鮮と中国、他方、アメリカと韓国と日本、その間では6者協議に対する考え方、あるいは利害関心、政策、目的、それが全く違っているんだということがわかります。

覚えておられると思いますけれども、オバマ政権成立以来、一度たりとも6者協議のセッションは持たれておりません。よくわかりませんが、ひょっとしたらこのことはオバマ政権の次のような気持ちを示しているのではないのでしょうか。

第一に、北朝鮮は絶対に核兵器をあきらめるつもりはないのだということ。第二に、6者協議というやり方は何の役にも立たないのだということを考えている。この2つだと思います。

ただし、アメリカは6者協議ということに口にすることはやめないだろうと思います。もう6者協議なんかやめちまえ、というようなことを絶対に口にはしないとします。なぜならば、この6者のうち誰もが、自分から最初にやめるとはいいい出したくないからです。

**質問** いま核のコマンド・コントロールはどうなっているとお考えか。それから、この核がルース化する、すなわちいま核のグリップを握っている連中から離れていくおそれ、核不拡散の問題なんですけれども、政局なり内部の情勢が不安定化することによって、そうなった場合の対策をアメリカは考えていると思うのですが、どうでしょうか。

**ストラウブ氏** 核デバイスのコマンド・アンド・コントロールについてという質問が第1点でしたけれども、私はそれにつきましての知識を持ち合わせておりません。

2つ目の質問の、いわゆる核兵器のルース化されたものをどうするかということですが、このルース・ニュークスにつきましては、新聞報道などによりますと、在韓米軍、それから韓国の軍部などが緊急時計画というのを立てているそうです。何か北朝鮮でことが起こり

大混乱になったときには、このルース・ニュークスについてどうするかという計画を立てているとのことでありませう。

私の憶測では、当面の間は、このルース化された核兵器というのはそんなに大きなリスクではないと思います。

それよりもより深刻な問題は、北朝鮮が持っております核技術の拡散であります。ご存じのように、イスラエルはシリアにあります原子炉を攻撃いたしましたけれども、あの原子炉は、基本的には北朝鮮がつくったものといわれております。それから、核分野、それからミサイルの分野におきまして、北朝鮮とイランの間で協力が行われているというようなことに関する報道がかなり出ております。どの程度それが正確な内容かはわかりませうけれども、また、核問題に関しましては、北朝鮮とパキスタンは明確に強い協力関係を持っております。

北朝鮮の国民といいますか、北朝鮮の人たちに関しまして、これだけの疑問の念を持っている私でさえも、シリアの原子炉は基本的には北朝鮮がつくったなどということをお聞きしたときには、本当にショックを受けました。

**質問** 先ほど中国と北朝鮮との長期的なことのお話がありましたけれども、短期的にみた場合に、北朝鮮の核開発をやめさせるには、やはり中国の影響力というのが非常に大事なんだろうと思うのです。最近の報道をみますと、移動発射台は中国から供与されたものとか、これまでもいろいろな軍事技術を含めて中国は北朝鮮にいろいろな援助をやっている。これは明らかに 3 年前の国連安全保障理事会の決議に違反している行動だと思うのです。そうすると、中国をしてそれをやめさせて、北朝鮮に影響力を行使させる、これはどのようにしたらいいんでしょうか。本来なら中国自身に制裁を課すぐらいのことが必要なんじゃないかと思うのですけれども、それはそう簡単にはいかないと思います。

**ストラウブ氏** 難しい質問ですね。北朝鮮の

行動をもうちょっとちゃんとしたものにするように、中国が持つ影響力を行使しろという方向に向かって、米国、日本、韓国を含めその他の国はずっと長年努力をしまりました。

私は前にも言及いたしましたように、米国が朝鮮半島に対する影響力を行使することをある程度抑制する、チェックするということが、まず一番大きな中国の対北朝鮮への動機づけであろうと思っております。特に中国の軍隊、人民解放軍におきましては、その感覚は強いだろうと思います。

その移動型の発射台を北朝鮮に輸出する、提供するということに関しましては、私は中国の専門家ではありませんのでよくわかりませう。どの程度軍以外のところがかわったのかということをお聞きを、私は知りませう。

### まだまだ中国はネガティブな役割

私の印象といたしましては、中国人というのは、こと制裁ということになりますと、できるだけ北朝鮮に対する制裁の度合いでありますとか、圧力の度合いをなるべく薄めるようにという努力をするし、一たん制裁の内容が決まってしまうならば、それを正確に実行することにはほとんど関心を払わない。こういうのが中国人の大体の態度ではなかったかと思うのです。けれども、北朝鮮が核実験、あるいは核関連の実験などをするようになりましてから、北朝鮮との貿易は相当ふえておりますし、絶対額におきましては、北朝鮮と中国の間の貿易額は何倍にもふえております。

ということで、日・米・中国の間でいまよりももっとしっかりした相互に信頼し合うような仕組みが構築されるようになるまでは、そして、中国の政治システムがより民主化され、よりみずからが自信をもってことに当たることのできるようになる、そういう体制ができ上がるまでは、残念なのですけれども、中国というのは北朝鮮に関しましてはネガティブな役割を果たし続けることになってしまうのではないかと思います。

**質問** 私は、直近の問題よりもロングレンジの問題が重要ではないかと思うのです。ストラウブさんは、中国は完全な民主主義の国ではないけれども、まだ民主主義に近い、あるいは経済的にもよりオープンになった、そういう社会であるというコメントをなさいました。例えば米国の政府が、あるいは将来の米国の政権が、最終的にはもちろん北が完全に民主主義の国になることを望んではいらっしゃるのでしょうか、そのちょっと手前のところで、やや変形といいますか、形が変わった民主化というものも考えているかもしれないというようなことを、果たして北は考えているのでしょうか。あるいはそんなことは全く思いついていないのでしょうか。

もう1つ。アメリカ・韓国・日本の3国間の協調の関係ということもお話しになったけれども、日本と韓国の間は、慰安婦の問題もありますし、領土の問題もあるし、歴史認識の問題もある。それからアメリカとでは、沖縄問題を初めとしていろいろな問題がある。そういう目前にいろいろな問題があって、日本とアメリカ、日本と韓国との間で隔意のない意見交換ができる状況に必ずしもないということに関して、コメントをお願いします。

### 中国のように北がなれば歓迎する

**ストラウブ氏** 私は、ひょっとしたら中国の影響下のもとで北朝鮮が徐々に開放を進め、経済を徐々に改善させ、そして北朝鮮の人たちの多くが携帯電話を持つようになるというようなシナリオを描くことは可能だと思っております。それはいいことでもありますし、例えば李明博大統領のような、いわゆる強硬派と呼ばれている人でさえ、北朝鮮が中国スタイルのような発展をしたらどんなにいいだろうか、というようなことを公にはっきりとっております。

北朝鮮のエリートの中にも、おそらくは、そういうことがあったらいいのになんかということを考えている人は多くいるだろうと、私は思うのです。しかし、そういう勢力の存在も、あるいはいまの政府省庁が特にそういった動きを

プッシュしている勢力であるなどというようなことは知りません。

李明博大統領だけではなく、アメリカも、中国のような北朝鮮になってくれたら、それは喜ばしい。それはアメリカにとって脅威のレベルが下がるような存在でもあります。民主的な形で朝鮮半島が統一されることを、アメリカは心から望んでおりますけれども、我々にとって一番大事なものは、大韓民国の安全保障であり、それからまた北朝鮮の国民たちがよりよい生活をするということでもあります。ですから、そういったことが担保されるものであるならば、そのような状況を、我々はそれとともに歩むということは何ら問題がないと思っております。

2つ目の質問は、実は私が展開いたしました論点の中で最も弱いところを突いた質問であります。一国が、特に民主国家であればあるほど、長期にわたって外交政策が常に首尾一貫している、整合性を持っているということはなかなか難しいものであります。

アメリカにおきましても、北朝鮮に対する外交姿勢に関しましては、いろいろと矛盾するところ、整合性のないところがありました。また、韓国の国民世論は進歩派對保守派で、北朝鮮をどうみるかというところで大きく分かれております。

アメリカと日本は、おおむね北朝鮮に対しましては同じ見方をしているけれども、それでもやはり、国が違えば有権者も違う、それぞれの国の歴史も違うわけでありまして。それで時によりコーディネーションとか、意見の一致が、北朝鮮に関しましてはみられなくなってしまうときがあつたりするのも事実であります。

ですから、これはなかなか難しいことであるということをご認識の上で申しあげます。特にこれまでの数年間は、日・米・韓の間では非常によく物事がすり合わされて展開してきたと思っております。たしかに将来においては何かがあるかわかりませんが、ひょっとしたらコーディネーションが全くできなくなるような、嫌になるような状況が到来する可能性があるかもしれません。けれども、長期的には、私は、共通の理

解を持ちながら共通の政策を立案していくことができるという、そういう妥当なチャンスはあるのではないかとみております。

**質問** 最近、金正日の遺訓、遺言というものを韓国の脱北者が発表したんですが、この信憑性、またそれに対するコメントがありましたら教えてください。

**ストラウブ氏** 私もあの報道はみました。あり得る話であるとは思いましたが、私は、韓国から上がってくる情報は常に疑惑の念を持ってみております。なぜならば、韓国は、北朝鮮に対して諜報戦を仕掛けているし、プロパガンダ戦争をやっている国でもあるからです。ひょっとしたらあれは真正遺言であって、非常に大切なものかもしれないけれども、ひょっとしたらあれは完全な偽物かもしれない。あなたに、あれを本物だと信じるに足る理由があるとすれば、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

**質問** 過去を振り返って、ブッシュ政権時代のアメリカの対北朝鮮政策についてお尋ねしたいと思います。今年になりましてコンドリーザ・ライス元国務長官が回顧録を書いた。『No Higher Honor』という本を出版しましたね。その中でブッシュ政権の初期の段階の北朝鮮政策について触れている。ジム・ケリー元国務次官補が北朝鮮と交渉するという事態について、彼女が非常に批判的なコメントをそのときに出します。国務省のやり方は非常にソフトである（ソフト過ぎるということですね）と。その上で、ホワイトハウスでは3つのアプローチ法を考えたということ、彼女は書いております。副大統領のオフィスは、北朝鮮に対してはレジーム・チェンジでのぞんでいた。それからマイケル・グリーンからは、それぞれエンゲージメントを進めようという意見も出てくる。その一方で、テーラード・コンテインメントというアプローチがあり、ホワイトハウスとしてはこのテーラード・コンテインメントを政策として採

用したということが書かれています。

としますと、ブッシュ政権下においてこのテーラード・コンテインメントという対北朝鮮政策は一貫した政策、あるいは戦略として採用されていたのかどうか。この点についてストラウブさんはどういう評価をされていますでしょうか。

彼女は後年、国務長官になった後は、クリストファー・ヒル大使を交渉の担当者とさせ、今度は本人が交渉に乗り出していくわけです。その点、一貫性という点ではどうなのかなとちょっと疑問に思うところもあるのです。また、そのときにおいても副大統領と対立したことも、彼女はその回顧録で触れています。この点についてストラウブさんはどう観察し、どう評価されていますでしょうか。

### ブッシュ政権の対北政策はゼロだった

**ストラウブ氏** 北朝鮮に対するブッシュ政権の政策には全く一貫性はありませんでした。おっしゃるとおりです。事実上、ブッシュ政権の北朝鮮政策はゼロだったというのが事実です。

まず、ブッシュ政権の1期目におきましては、彼の周辺を取り囲んでいた人たちというのは、合理性にせよ、判断力にせよ、ちょっとおかしいと思わざるを得ないような人たちでした。

私は専門職として韓国の問題をやっている人間として、これは読まなきゃいかんと思いましたので、あの本が出てすぐには買いました。でも、どうしてもページを開くことができないのです。

私はいまでもブッシュ政権に対する怒りをぬぐい切れないでいるのです。ただ単に北朝鮮政策が間違っていたとか、そういうことだけではなくて、本当に、我が国の国益に対して長期的に、外交的にあのような損害をもたらしてしまったということに、私はいまでも怒っているのです。

まず1期目に、彼は政府のトップレベルでい

ろいろな人を指名したのですけれども、お互いにお互いを嫌い合っているというような人たちを任命したんです。

それから、彼の1期目には2つの戦争が行われました。何千人というアメリカの若い兵士たちが命を失いましたし、外国人が何十万と命を失うか、あるいは自分たちの家から退去せざるを得ないような状況に追い込まれました。

これだけの大きな戦争を2つ抱えながら、しかもこれだけの貴重な人命を失いつつあるときにも、事実として私は知っておりますけれども、コリン・パウエルとラムズフェルドはあまりにもお互いが大嫌いであって、国務長官と国防長官が口すらきかないという関係にありました。

北朝鮮を何とかしよう、北朝鮮とどうしようかなどというようなことではなく、お互いにお互いの裏をかくためには何ができるかということだけに関心を持っていました。

ライス長官の言に至っては、例えばジム・ケリーのよう——あの人はキャリアの海軍士官で、しかも保守派の海軍士官である——あのような人物に向かって「too soft だ」などというのは軽蔑にも値しないような評価であります。ちょっといい過ぎました（笑）。

**司会** どうもありがとうございました。最後に本音が出ましたが（笑）、彼はクリントンさんと一緒に北朝鮮に行ったそうですから。

**ストラウブ氏** 私はジョージ・W・ブッシュのお父さんは大好きです。

**司会** われわれのために時間を取っていただき、ありがとうございました。

**（文責・編集部）**

## デービッド・ストラウブ

スタンフォード大学 韓国研究プログラム 副ディレクター



米務省で主に北東アジアを担当しながら30年間勤務し、うち12年あまり朝鮮半島を担当。1999年から在韓米国大使館の政務担当公使を務めたあと、2002年から米務省朝鮮部長として北朝鮮の核開発をめぐる6者協議の実務レベルで主要な役割を担った。2004年からは米務省日本部長として在日米軍再編をめぐる日米協議で米国側の共同代表を務めた。在日米国大使館には計8年間勤務。2006年に米務省を退職後、ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題大学院やソウル国立大学国際大学院で教え、2008年より現職。米韓関係をめぐる論文を数多く手がけ、現在は近年の両国関係についての本を執筆中。